

自身の秋田での〈旅〉と 次なる〈旅〉

2020.10.18

旅する地域考2020 最終発表

青木 理佳

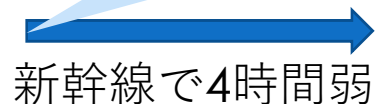
これまでの自分の過ごし方

これまでの自分

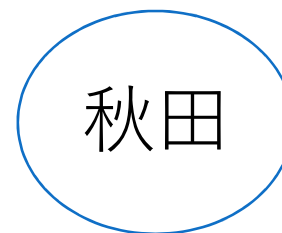
1996~2019.4(22年)



民間企業入社
(転勤あり)



2019.5~現在(1.5年)



実家暮らし
「東京で生まれ育った」

一人暮らし
「生まれ育った場所から
初めて離れる」
「縁もゆかりもない土地」
社の方針からの推定では
約3年で異動

※ここ数か月の状況



コロナの下では
行き来が困難



問い：

私は今、旅をしているのか？



旅でない日常

(これまでのように)
地域に暮らす人として
日々を過ごす

← 行ったり来たり →

旅の途中

地域の外から来た人・
一時的に滞在する人として
日々を過ごす

旅でない日常の時間という認識

家があり、行き帰りをする
日々のルーティーンの起点

自分が食べるものを
購入し、調理し、
食べる

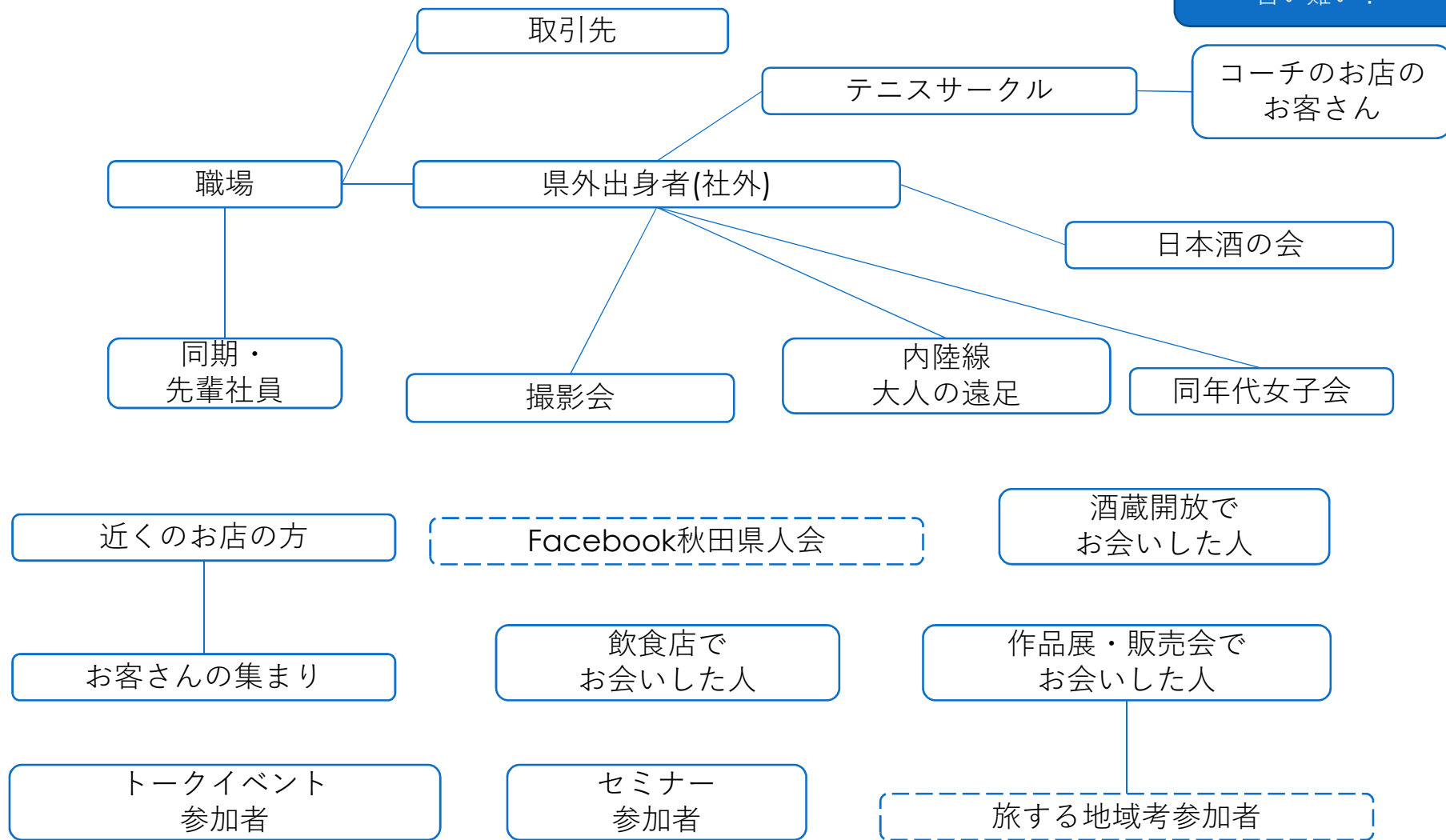
仕事をする

行きつけのお店で
お店の方とお話をする

人と出会い、
(長期的な)人間関係を
つくる

※1.5年間での人とのつながりは？

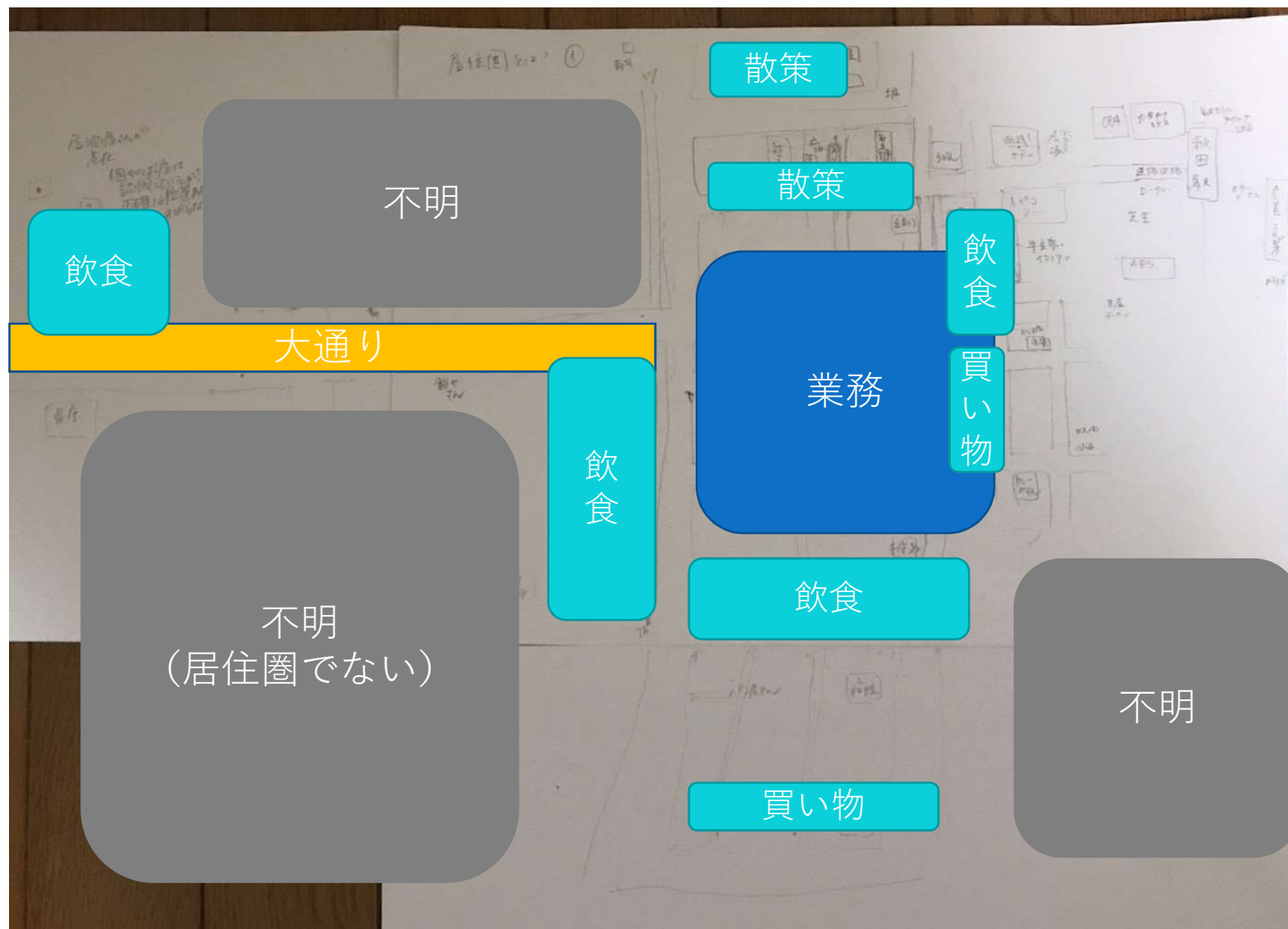
地域の一員とは
言い難い？



※タビコウタスクから:自分の居住圏は？



※タビコウタスクから:自分の居住圏は？



※タビコウタスクから:自分の居住圏は？

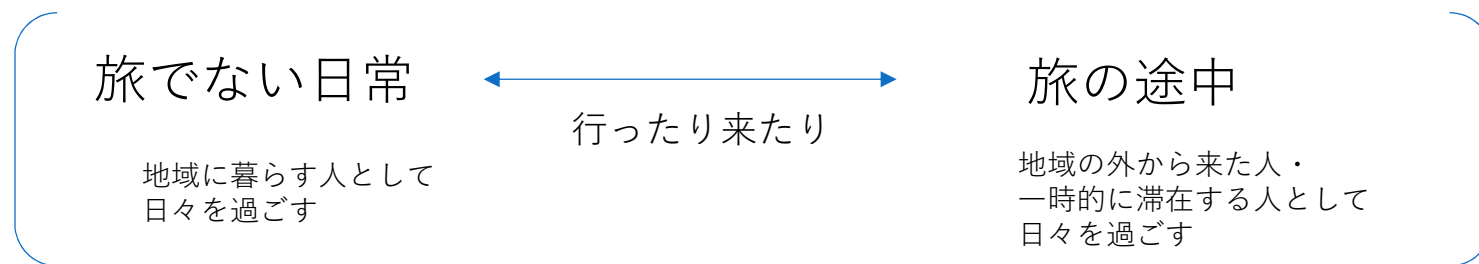
- 通勤路＋買い物＋飲食の経路とその周辺を居住圏として認識している＝円ではなくいびつな形
 - 居住圏の内部で通勤が完結
 - 買い物...食材の購入（スーパー、パン屋、市場）
日用品の購入
 - 飲食店...飲み会＝食に触れる＋コミュニティ形成の中心
※人に会う予定がない限りは自炊
- 車・自転車を保有していないため徒歩での移動
...比較的居住圏の認識範囲が小さいか
飲食店へは多少遠くても歩いて移動してしまう

⇒自らが身を置いて移動し日々暮らしを営む範囲を居住圏と認識

旅の途中であるとの認識

- **「この土地での時間は有限だ」という潜在意識のもと行動している**
 - 休日に県内・近郊に行く機会を(半ば強引に)つくる
 - 地のものを食べようとする
 - 季節のものを食べようとする
- **ご当地Tシャツを買う (いぶりがっこ)**
- **自分がよそ者・かりそめの身であることを思い出す**
触れあった人から「秋田に永住しなよ」(お酒の席でご一緒する人)、
「こっちのほうだとこれを食べるよ」(市場の人)など話をされる
- **地域の物々交換の経済圏に入れない**
 - 「お米はもらうもの」の概念が自分にはない
 - 職場の方にりんごやさつまいもを分けていただいても自分はそれに値するものをお返しできない

秋田での自分の過ごし方



地域での不安定な立場（暮らしていた場所から離れる/一時的な場所）

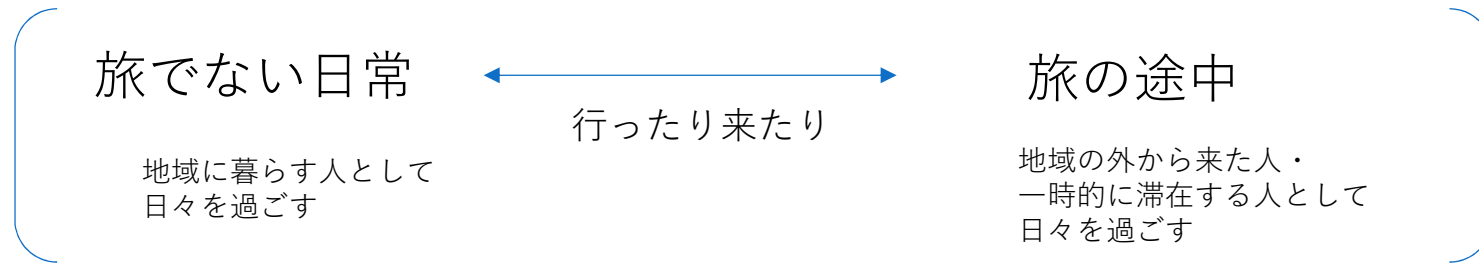
- ・ 日常が揺れ動き、ともすればもといた場所を起点に考えてしまい
「遠いところに一人」という考えに絶望しそうな危うさ
- ※ 月日を経るごとに安定してきた感覚
...暮らし：衣食住や人間関係の蓄積による

一方で

「旅先での過ごし方」として捉えた時の日々の豊かさの際立ち

- ・ 限りある時間で何ができる？
1週間で休みは2回。ひと月では？ 1年では？
ここでだからできる仕事は？ 春はあと何回来る？
- ・ 土地で過ごす間、身体センサーの感度が高まる
見る、聞く、匂いを感じる、触れる、味わう
情報を集める、足を運んでまた感じる

過ごし方：考え方を変えると



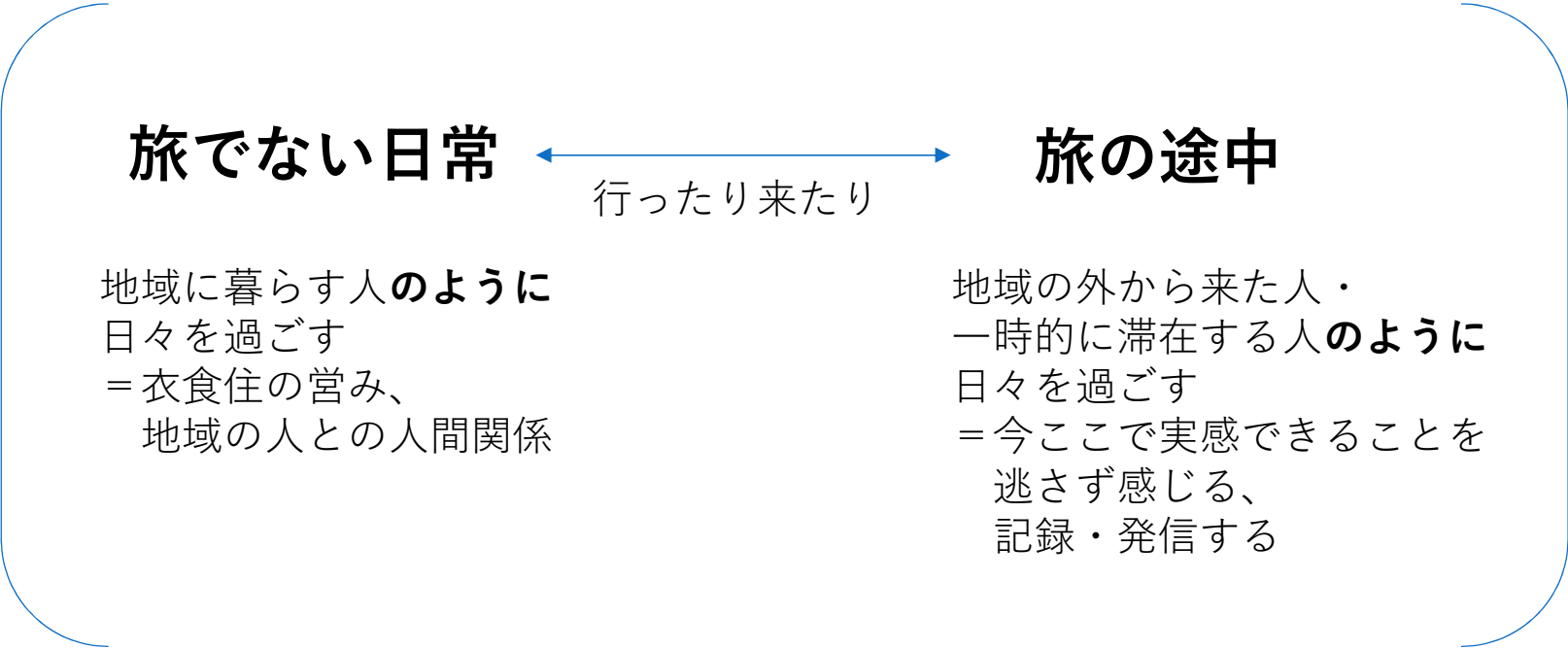
地域での不安定な立場（暮らしていた場所から離れる/一時的な場所）

⇒ **自分以外にも生じうる（今後は動きが加速するかもしれない）**

- ・ 転勤が発生する社員・職員やその家族
- ・ コロナ禍での密を避けた地方回帰.....移住へ？
- ・ リモートワークへ移行する”一大社会実験”
- ・ ワークーションでの中長期滞在（今の自分は長期ワークーション？）
- ・ 定住の地をもたない生活

「旅先での過ごし方」として捉えた時の日々の豊かさの立ち

- ・ 限りある時間で何ができる？
⇒ **そもそもどこにいても生きる時間は有限**
- ・ 土地で過ごす間、身体センサーの感度が高まる
見る、聞く、匂いを感じる、触れる、味わう
情報を集める、足を運んでまた感じる、記録・発信する
⇒ **どの土地でも自分の身体のパテンシャルはあるはず**



この構造は、どの地域でも成立するひとつの旅の形になるのではないか。
(以後、「〈旅〉」と表記する)

次なる〈旅〉について

次なる〈旅〉の提案

- ・対象者：

- ・秋田で暮らす人
- ・秋田以外の地域で暮らす人

- ・方法：

先ほどの〈旅〉の構造を踏まえ、
自分のこれまでの秋田での生活の中で、〈旅〉先として見た時の
秋田を示す

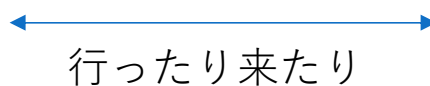
⇒ **「食」をテーマとして提示する**

- ①暮らし・身体に密接にかかわる
- ②通常の観光においてキラークンテンツである
- ③自分は食べることが好きである（自他ともに認める）
...タスク1での原初の記憶＝おいしかった牛乳

「食」の視点で〈旅〉を考えると

旅でない日常

- ・ 日々の暮らしの中で生きていくために、食べる
→自分の身体をつくっていく
- ・ 自分で食材を買い、調理する
- ・ 人間関係を介在するものとして食を機会にする
(会食、贈答)



旅の途中

- ・ 旬のものを味わう
- ・ 地のものを味わう
- ・ 食材の産地に行ってみる、自分でとってみる
- ・ よくわからないものを思い切って食べる
- ・ 食べ物について周囲の人にきく

秋田での〈旅〉での食との関わり

...身体が動かされている・そこで人と関わろうとしている

見たことのない食材を買って調理してみる

秋田駅近くの秋田市民市場をはじめ、スーパーでも野菜、魚、めんなど初めて見るものが。お店の方にアドバイスを伺うなどして思い切って購入して料理すると、おいしいかは断言できないが新たな発見が得られる。

季節を身体で感じ味わう

春夏秋冬がくっきりしており、秋から冬へ駆け足で過ぎていく様子も春が来る喜びも感じられる。自然が生活の近くにあるため、その表情の変化も手に取るようにわかる。そんな季節の移り変わりの中で、店先に並ぶ食材には有無を言わせぬ勢いがある。季節ごとの食べるものリストが私の頭の中で日々更新されている。

人をつなぐ食、食をつなぐ人

お菓子屋さんや飲食店でお店の方とお話をしたことで、いつしか自分の大事な場所になっていた（タビコウタスクでのお菓子屋さんもその一つに）。秋田でできたコミュニティは、おいしい料理に美味しいお酒、という席が多い。そこで地域の方に美味しいものを教えていただき、食べに行くことも。今回のタビコウでのレクチャーをきっかけに、地域の生産者の存在にも興味をもった。

産地に近い、行ってしまおう

初夏の岩牡蠣が美味しいと聞きつけて急遽出かけたり、皆でじゅんさいの名産地に行って摘み方や食べ方を教わって採りたてをいただいたり。ひとときわおいしく感じる。

- ・・・これはいい方法ではない
分類できていない、表現できていない

ひとまとまりの文章にしたいくなった

提案にあたっての制作（１）「だだみ」



提案にあたっての制作（1）「だだみ」

だだみ。だだみ。ぎりりと凍える冬に店に滑り込むといつも目につく、「だだみ」。何かと思えば、鱈の白子のこと。天ぷらを箸でそおつと運び、柔らかい形をつくっている膜が薄い衣とともに弾けると、とたんに口いっぱいにとろりとした旨みが広がる。それを日本酒でするつと流すとなんと幸せなこと。だだみ、という音も、しらこ、よりあたたかくて、ここでしか通じない秘密の合言葉のよう。そういうえば向こうにいる時は口にする機会があったんだろうか。また声に出して言いたい「だだみ」。

提案にあたっての制作（2）「山菜」



提案にあたっての制作（２）「山菜」

これまで山菜そばは絶対に頼まなかった。あの茶色くて眉間に皺が寄ってしまいうなものを載せてくれるなと思っていた。が、こちらであまりに山菜の話をされるので、今が季節だという春先にえいやと重い腰を上げた。いざ口にすると、「山菜」という語をあまりに軽視していたことに後悔した。根曲がり竹、こしあぶらみず……。どんな姿で自生しているかはわからない。けれども、各々がその性格としてもつ粘りや歯ごたえ、口に残る苦味、抜けていく香りを味わいながら、この場所にとどり着くまでを想像する。ああ、今、山の幸を頂いているんだ。それもこの土地の。「山菜」に勢いよく血が通った。そうして今も次の春を待っている。

提案にあたっての制作（3）「新米」



提案にあたっての制作（3）「新米」

今年はいまだかつてのようには新米を食べられない。その実感が、日を追うごとに積もっていた。私はあまりにも田を知らなかった。寒さが緩みはじめたころ水面が空や夕日を映す田、小さかった線がぐんぐんと青く力強くのびてゆく田、見え隠れする穂が頭をもたげはじめた田、黄金色に、ほんとうに黄金色に輝く田。そして刻一刻と変わる空間にさらされる広大な田を守る人が確かにいる。まだ知らないことも多いけれど、すぐ近くで同じだけ月日を過ごしてきた。さあ、新米の季節がやってきた。

おわりに、考えていること

- ・ いつか秋田を離れるときも、食とその記憶を通じて秋田をとりこんだ身体とともに次の地に移れるという実感をもった
- ・ 人となぜか話ができるしまうのは秋田だからかもしれない
- ・ ことばにしたくなかったのは自分でも驚いた
...タビコウを通じて表現者の皆さんと触れ合った、
アウトプットの機会を得られた、
「なんでも受け入れてもらえそう」という感覚があった
- ・ 旅には余裕が必要、かもしれない